めだか大学通信12号　１３年２月

　昨年の「クリスマス交流会」の時の感想を、11号の中村由紀男さん・中村京子さん・柴田鉄世さんに続き、到着順にお送りします。
　どれもとても充実していて、6月の時より、皆さんの感じ方・理解のしかたが1歩進んだ気がして嬉しいです。今後もお待ちしています。また松島さんのコンサートに行かれた方は、それもお寄せください。　　岡田　京子

●小関玲子　（つくり小屋）
　24日の交流会は、時間の長さを忘れるほど、聞きごたえがあり、楽しかったです。6月のコンサートは、聞きに来て下さった方々に、聞いてもらう事が、ひとつの大きな目的でしたが、今回は、クリスマス交流会と言う事で、私にとっては、一緒に作っている仲間の曲を、十分に楽しむ時間でした。そして２部では、皆でやってきた事の意味を確認できました。参加できてよかったな、と思います。
　もちろん、どの曲も良かったのですが、小池さんの歌には涙が出ました。また、今井さんが作られた歌を皆で歌ったら、今起きている問題も、壁がなくなるのに、と思いました。偉い方たちが言葉で話すより、皆で歌を歌う方が、力がある気がしました。こういう歌を、自然に歌える世の中になるといいなあ、と思いました。
　子どもの頃大好きだった、啄木の短歌に触れられた事も、感激しました。曲をつけるなど、思いも寄らなかった事です。感動しました。
　そして、この日の後で思った事です。暮れのTVを見ていて、最近の歌は、覚えられないのが多いよね、と話したら、子どもが、自分たちには、昔流行った演歌の方が全然覚えられない、というのです。やはり、今の時代に育っている子ども達は聞き慣れた歌が自然と入っていくのでしょう。それは、否定できないことなのだと思います。でも、私だって、好きなアーチストのライブに行って、盛りあがったりするのです。でも、やはりここで再認識した音階の歌は、別な感覚で自分に入ってきます。それに気がついた以上、繋いでいく、伝えていく事をしていきたいと思います。

●船岡嘉彦　（すみれ分教場）

全曲について、私の感じたことを短く記します。

☆小海小学校・・・何度も聴き、歌いあっているが、子供時代の懐かしさが毎回込み上げてくる。
☆ホームカフェ・・ほのぼのとした温かさを感じる、その場に私も居たいと思う。
☆うちのお父ちゃん・・娘の、父に対する深い愛情が明るくほのぼのと伝わってくる。
☆君には何が見える？・祖父の、耳が不自由な孫に対する優しい思いが響いてくる。
☆あなたにありがとう・・母の、娘に対する切なくも温かい愛情がほとばしっている。
☆１１歳の秋に・・・子供の時に出会った衝撃的な事実と真摯に向き合いながら、自分の生き方を模索する、厳しさとたくましさを感じる。
☆啄木抄・・・・啄木の詩が心から好きだという思いが伝わってくる。特に、「さいはての」は、私の原風景と重なって心に浸みてくる。
☆国民学校の歌・・・三宅さんの戦争中の体験談でありながら、戦後生まれの私にとっても過去のことではなく、今の日本の現実と重なってきて、苦しくなってくるし、再びこのような悲惨なことを繰り返したくないとの強い思いがでてくる。
☆柿の木に・・オレンジと白との色鮮やかな対比の中に、静けさが伝わってくる。私の故郷の風景を思い出す。
☆たなばた・・・宇宙規模の大きさの中に切なさと希望がみえる。
☆あなたへ・・父母の、子供に対する深い愛情が伝わってくる。
☆お父さんに・・子供たちの成長を通して亡き夫（お父さん）への切ないながらも深い愛情がひしひしと伝わってくる。
☆ソンネリ・・再会・峠ごえ・秋夕・・山田さんの在日の夫との深い絆がくっきりとうかびあがるし、亡き夫への強くて深くて優しい気持ちが伝わってくる。
☆富士見橋・・細田さんらしい表現で、地元の変わりゆく街並みの風景の中に悠然とたたずむ富士山の対比を通して、懐かしくも切ない思いが伝わってくる。
☆あなたと共に・・厳しい歴史の真実と真正面から向き合う、辛さとたくましさが響いてくる。
☆石巻・・被災地にた立った時の、強烈な思いと深い愛情が感じられる。私も、石巻に今年の春にい行ってきたので、とても良よく分かるし、日より山に登って変わり果てた姿を目にしてきたので、とても共感が持てる。
みんないっしょだからね・・心が癒されるとてもすてきな歌で、私も歌って

みたい。
☆ふるさと・・転校が多く、故郷を実感できない自分にとって深くしみこんでくる歌。
☆「廚」（くりや）について
この短歌は、私の母の作品で、曲は「すみれ分教場」の共作です。
私の母は、山形の田舎で一人暮らしをしながら生きがいであった短歌作りにいそしんでいた。私が帰郷する度に、母は私に「こんな短歌ができた」と嬉しそうに見せてくれたのに、私はあまり関心を持たず、いい加減に対応していた。母が亡くなってから、数百もの母の創った短歌をみつけ、母の生き様や感性の深さを知り愕然としたし、自分の愚かさと共に、これらの短歌をなんらかの形で残したいと思っていた。その時に、「すみれ」の中で、民謡音階での曲作りがあり、その中で共に創りだしたのがこの「廚」であった。
作曲の過程は、岡田さんの適切な導きもあり、そんなに大きな苦労はなかったが、いざ、歌ってみるとなかなか難しいし、情景が途切れ途切れの印象になったりした。しかし、繰り返し歌う中で、少しずつ自分の中で、明確になってきた。とりわけ、前回発表した「母さん、ごめんなさい、そして、ありがとう」の自作の曲作りは、母に対する自分を真摯にみつめる機会となり、曲も鮮明になって、これからも歌い続けたいと思うようにもなってきた。
「廚」をこの間、安達さん、鈴木さん、そして今回は、岡田さんの伴奏で歌ったが、それぞれの特徴があるのも感じられた。
安達さんには、安心してお任せでき、自分が自由に歌える心地良さを教えていただいた。鈴木さんには、自分がこの歌をどのようにとらえ表現していくのかを問われ、自分の歌としての方向生性を教えていただいた。岡田さんには、民謡音階の深さと豊かさを、それぞれ短歌と曲のハーモニーを心身で受け止め感じることを教えていただいた。
この貴重な体体験を踏まえ、これからも表現して生きたいと思う。皆様、ありがとうございました。
☆全体について
全ての曲から滲み出てくるものは、人間の普遍性につながるものであり、自分のこころの中に深くしみこんでくるし、共感するし、民謡音階のもつ、生命力を感じる。たった５音のつながりと音の流れで、豊かな曲が生み出されるのには本当に驚かされる。
それと共に、「すみれ」「つくり小屋」「にんじん畑」というグループの違い、人間集団の違いが、それぞれの色合いや特徴を持って出てくることも面白いと思った。
私の主観では、「すみれ」は橙色、「つくり小屋」は、青色、「にんじん畑」は

白色という感じがする。みんな違ってみんな良いというのが実感である。次回が楽しみである。
（２部）
　「生命記憶」の話では、最先端の医学の到達点という科学的根拠と、岡田さんの音楽理論とを結びつける試みを素晴らしいものだと思う。内容も、納得のいくことばかりで、あらためて「民謡音階」の持つ普遍性と生命力を感じた。そもそも、自分の存在は、ビッグバン以来の宇宙の営みでもたらされたものであるのは事実であるし、その生命記憶が心身に存在するのは当然のことだと思う。けれど、そのことを自覚し、表現していくことは難しいことだと思っていたし、とりわけ私にとって苦手意識のあった音楽について、どうしたらいいのか良く分からなかった。ところが、岡田さんと出会い、「民謡音階」という心のふるさとを取り戻す試みを始め、実際に詩を作り曲を作る中で少しずつ実感できるようになってきた。
　今回の岡田さんの「生命記憶」の話を聞いて、さらに確信が深まった。あれこれ眼移りせず自分と向き合って、この歌作りにも取り組んでいきたいと思う。皆の感想を聞きながら、本当に豊かで面白い場だとつくづく感じた。
「すみれ」の一員として誇りをもって、今後も研鑽して生きたいと思う。場所は離れても歌を通してつながって生きたいと思う。

●桑原正美　（にんじん畑）
　「めだか大学通信11号」を送っていただき、ありがとうございました。私は都合で出席出来ませんでしたが、とても深い充実した時間を皆さんが過ごしたのだと云うことが伝わってきました。
　生命記憶の講義、聞くことができず、残念でした。１月の「にんじん畑」ではまたよろしくお願いいたします。　特別に寒い日が続いています。皆さん、お体にどうぞ気をつけてください。

●増田康子　（にんじん畑）
　1部では、　自作の歌を、気持をこめて歌う皆さんを見ていて、まるで大事に育てた子どもを晴れの舞台でお披露目するようだなと思いました。
　6月30日の発表から、また新しい曲を作られた皆さんの曲は、その人らしさや癖のようなものがはっきりにじみ出てきているのがわかり、新しい曲を聴きながらも6月30日の発表のときの空気を感じました。
　そして、何曲も作った山田三重子さんのご主人への愛情とパワーには尊敬の意を表したいです。
　ご主人を失くされたばかりの頃に、「ゆめりあホール」でチマチョゴリを着て、

涙ぐみながら「ホルロアリラン」を歌った山田さんを思い出し、私が言うのは失礼で生意気かもしれませんが、たくましくなられたなあと思いました。
　2部の「生命記憶」について
　とても難しい話でしたが、生命記憶とはどんなものなのか私なりに考えてみました。
　経験から来る「物の感じ方」とは違って、説明のつかない「懐かしさ」「フィット感」。
初めて聴く音楽なのに、優しい感じがしたり、懐かしい感じがしたり、なんてきれいな音楽なんだろうと思う気持は、どこから来るのだろうと思った事があります。
　説明がつかないのに、私だけでなくみんなが同じように感じると言うのはどういうことなのだろうと。
　また、生物の「進化」にも生命記憶は関係していて、生きていく上に不可欠でいつも使われる機能が進化して行ったり、あまり必要のないものが退化してしまうのも「生命記憶」が受け継がれていくからなのでは？
　生まれながらにして他人と共有している生命の記憶があるから、同じ音楽を聴いて共感することができるのでしょう。
　あまりにも神秘的すぎて、まだまだわからないことだらけです。

●村上稔子（すみれ分教場）
　我が家で「アート書道」をしています。　年末に「1年を振り返り1文字で書いて」と言われました。私はコレしかないと思い「歌」と書きました。
　父と母の歌を作り、それを唄うことで、幼い頃の幸せだった気持ちが、より確かなものとして私の中によみがえって来ました。この歌たちはきっとこれからも、私を支えてくれると思います。
　歌を作ることは想いを言葉にし、言葉を音にし、その音を感じることで、より自分を知ることなのだと、以前よりもわかりました。
　他の人たちの歌を聞いても、歌が以前よりも深く、ますますその人らしくなっているのもわかりました。

●小池久美子（つくり小屋）
　皆さんの思いが詞になり歌になって私たちに届き、素敵なクリスマスコンサートと鳴ったと思います。
　親・子ども・孫・家族への思い、戦争という時代の複雑な心の思いなど、一人ひとりの胸の奥にあったものが、私たちの心に響く歌となって届きました。
　とくに山本坦さんの「ふるさと」は、何故かよくわからないのですが私の心

に深くしみる詩でした。
　また夜の交流会での、皆さんの歌に寄せたお話では、より深い思いが伝わり心温まる時でした。岡田先生のお話には、どんどん不思議な世界に引きこまれて行き…そして自分にもつながって行きました。…？まだまだ理解できませんでしたが、すごく興味深いお話でした。
　あっという間に過ぎたクリスマスの夜でした。ありがとうございました。

●今井治江（つくり小屋）
　なんでこんなにみんなの歌や詞が、私のハートに直行なのか、自分がおかしいんじゃないかと思うくらい、最初から最後まで、涙が出てしょうがなかった。
　このことは、私の中の「生命記憶」に響いたからなんだと、2部のお話を聞く中で理解した。また自分の中に記憶された響き(音)を見出し、それがそれぞれの生き方や歌とつながりあっていくんだと思ったら、ほんとうにそんな気がして、思わず隣の渡辺さんの肩をなでてしまった。「自分の作った言葉を自分で作曲し､それを自分で歌い、それを聞いてもらい、またそれをみんなで歌って共感する」…このことを思う存分体感したせいか、6月30日にはなかった幸福感で一杯でした。
　長野に帰った時、こんな歌の会が出来てつながり合えたら良いなぁーと、ふと思った。渡辺さん･中村さん・村上さんたちは北海道でやられるんですね。夢が広がる。でも淋しい。いつか行って、また一緒に歌いたい。
　小須田　淳　(つくり小屋)
　１部
　　最初にみんなでオープニングに｢小□小学校｣を歌ってくれて始まりました。みんなに歌ってもらうとすごく嬉しいというか、癒やされることを感じます。
　　この歌がきっかけとなり、小□小学校の同級会で、「なつかしい思い出」の文集を作ることになり、同級生のプロが１００ページを超える文章と写真を入れて制作中です。
　　この歌は「つくり小屋」のみんなが、頭をひねってくれた詞のアドバイスと、曲は
岡田さんの指導で出来ました。昨年の６月３０日のĆDを、今年の春の同級会で聞いてもらったら、みんな感動してくれてこうなったのです。ありがとうございました。
　２部
　　「生命記憶」について。三木成夫先生は、僕がいた東京医科歯科大学の解剖学教室に居られたと言うことでまわりに聞いてみたら、とことん自分の興味を追求する先生だったようです。先生の本を読んでみて、医学者ながらそ

の専門家たちも気がつかないことを解明して、一般の人にもわかるように説明されていることに驚きです。
「生命記憶」に関連して「体内時計」のこともあると思います。確かに、夜が明けたら起きて活動し日が沈んだら休むこと、自然に逆らって生きるのではなく、共生しなければならないのですが、今それをすることが難しい大変な世の中になっていることを改めて思います。

●細田　伸昭
　作年の秋から忙しくて、めだか大学には参加出来なかったけれど、久々の交流会でみなさんの作った歌の数々を聞いて、あらためて”歌の力”というものを感じました。
それにしてもみんな次々に歌を作っていてスゴイですね。お休みしている私は、ちょっと”浦島太郎”状態でした。
　それぞれの歌がその人らしくて良かったのですが、その中で一番印象に残ったのは、みやけしゅうじさんの「国民学校の歌」でした。自分の少年時代の戦争とそれが強いた理不尽な体験を、語りと歌の構成で作った作品にとても感動しました。
　私は、１月に作った「富士見橋」を岡田さんのアドバイスで、三線を弾きながら歌いました。自分で歌いながら、三線にのせた「富士見橋」はユーモラスな中に人生の節目々々が見える歌に仕上がっていたかな・・なんて思っていました。
やっぱり”歌”っていいですね。
　忙しい合間に、時々、詩を書きたいなと思うことがあります。でも、めだか大学に参加出来るのは、もう少し先になるかな・・・。

「すみれ分教場・北海道の活動通信」

北海道に移住した「すみれ分教場」が、早速新しい地で活動を始めました。これからこの通信も載せて行きますので、皆さん楽しみにしていてください。
他の方たちの活動も記録していきたいと思いますので、どんどん送ってくださいね。　　岡田

●１月１５日、千歳市のホームレストラン「もりのおとわ」で、「音のない君への子守唄」と「君には何が見える？」を歌いました。
聴いてくれたシェフやその奥様が「言葉の一つ一つが胸に入ってきた。歌詞にすごく感動した」と言ってくれました。そして、真面目な顔して『ぜひ、C

Dをだしたら』なんても言われました。

●１月１６日、千歳市の某旗開きで、”ゆう＆ヒロ”が１時間くらい、歌う会の伴奏と進行をしました。千歳では初めてのようで、リクエストに応じてロシア民謡を歌った時には、涙を流さんばかりに喜んでくれた年配の女性もいました。

●１月１９日、渡辺夫妻宅で最近毎月開いてきた年金者組合の食事会＆歌う会を発展させ、初めての「すみれ歌う会」を開きました。
今回からすみれ主催でやるので、毎回、岡田京子さんの歌やめだか大学でできた歌を紹介しようと打ち合わせし、今回は、日朗さんの「ホームカフェ」（これは、この会のテーマソングにもなりそう）を歌い、美智子さんの詩「11才の秋」を朗読、そして、由紀男の「君には何が見える？」をTV大画面に移った可夢生の写真を見ながら歌いました。
参加者には自分の音探しをすれば誰でも曲作りができることを『めだか大学』の作曲の仕方を簡単に話しました。
みんな、それぞれの歌をとても真剣に聴いてくれ、感動してくれたようです。
参加者は２０人くらいでした。何人かから「京都の人は今日はどうしたのですか？」と尋ねられ、村上さんもみなさんの中に定着している事を感じました。

中村　由紀男